

オネゲルはフランス「六人組」のひとりとして知られ、蒸気機関車が走る様子を彷彿させる代表作《パシフィック231》のように、モダニズムの作風で人気を博した。映画やラジオなど新しいジャンルにも多くの音楽を書き、さぞ未来志向かと思いきや、意外と本人はバッハをはじめとするドイツ音楽の伝統を重んじていた。本日演奏される《典礼風》は、カトリックの典礼から取られた言葉が各楽章の標題に付されている宗教的作品。戦争の暗い体験が、そのままシリアスな曲調でまとめ上げられた作曲者屈指の傑作だ。

A
2024
OCTOBER
[第2020回]
🎵🎵

鳥の歌に託された平和

アルテュール・オネゲル

Arthur Honegger (1892–1955)

張りつめた緊張感にあらわれる。怒り、哀訴、絶望
あらあらしい曲想が渦巻くなか、
一筋の希望のように鳥がさえずる――

イラストレーション: ©IKE

六人組

サティに次ぐ世代で、新古典主義的な新しい音楽の方向を模索しながらパリで活動していたオネゲル、プーランク、ミヨー、タイユフェール、デュレー、オーリックらは「六人組」と呼ばれた。オネゲルはその中心的な人物であったが、6人そろっての活動は数えるほどしかなく、それぞれの個性が新時代を切り拓いていった。

